

## 個人山行報告

### 穂高岳スポット

記 藤井諭

5月4日から3泊4日で穂高・上高地へ行った。この時期に私は7年連続で写真撮影に残雪の日本アルプスを中心に登っている。雪に覆われた雄大な山容と麓の新緑や花々のコントラスト、これが病みつきになりたまらないのだ。昨年は鳳凰三山を縦走、一昨年は燕岳から常念岳を縦走した。

今年はウェストンの著書「日本アルプスの登山と探検」に出てくる穂高スポットのコースを辿ってみた。1日目は嘉門次小屋まで入り、2日目に徳本峠小屋から霞沢岳を往復した。3日目は再び上高地に下り西穂山荘に泊まった。最終日は西穂独標を往復し、新穂高温泉に下った。霞沢岳からの穂高連峰の眺めは長年の夢のアングルだった。上高地から西穂山荘への道は誰にも会わない静寂のルートだった。幸い天候に恵まれ、西穂独標からの大展望は今回の山行のフィナーレを飾ってくれた。以下、特に印象に残ったことをまとめたのでご紹介したい。

#### (1) 徳本峠から霞沢岳のコース

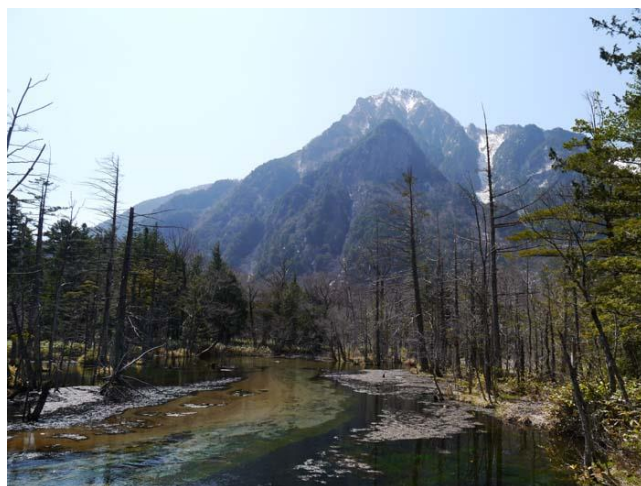
想像を超えて丸1日かかる長いコースだった。樹林帯の登り下りをくり返し、森林限界を超えるとピークK1への高度差200mの急坂となる。見た瞬間、登るのはともかく本当に下れるのか心配になったが、トレールが付いているので決心して登る。K1に立つと大展望が広がった。今まで見たことのない穂高連峰の全貌と左に焼岳、乗鞍岳、御岳、右に大天井岳、常念岳、中央



アルプス、そして下には上高地と見飽きることはない。下りは男女の4人パーティが先行したが、その中の若い女性が恐怖心からか後向きとなって下り、遅々として進まない。男性2人が前後に挟んで指示を与えている。時間がかかりそうだ。ピークに雪洞が掘ってあったので、中に入って寒い中を10分ほど待つ。やっと4人が下り切ったので、前向きでピッケルの3点確保で一步一步確実に降りた。程なく4人パーティに追いつき、挨拶を交わして追い越した。

#### (2) 上高地の様子

上高地は予想通りたくさんの人で賑わっていた。特に夕方の梓川左岸の河童橋～明神館は人通りが多かった。一方で早朝の明神池は無人で、好きなスポットで写真撮影が楽しめた。午前の右岸遊歩道（明神橋～河童橋）は比較的人は少なく、湿地帯の自然が豊かで写真を楽しめた。田代橋からいよいよ西穂山荘への登りにかかる。古い踏み跡はあるが消えかかっており、時々見



失って元へ戻り確認しながら進む。急坂が連続しトラバースも出てきたので、アイゼンを付けて登る。3時頃から風が強くなり、雪がちらつきだす。主尾根に出ると急に傾斜がゆるくなり、樹林帯を抜けると西穂山荘が見えてきた。周囲はすっかりガスに覆われていた。

### (3) 西穂高岳ルート

西穂山荘の夜は強風が吹き荒れ、時々小屋が揺れるほどだった。スマホで天気図を見ると、日本海を寒冷前線が通過中だった。この前線は今夜中に抜けて明日は天気が回復することを確信し、朝食を弁当に変更しておいた。朝4時半に起きると、外はガスに覆われているが風はおさまっていた。用意を整えて5時半に出発すると、丸山のあたりから雲がだんだん取れてきた。そして西穂独標に到着し、大展望を味わうことができた。正面に奥穂高岳への岩峰群と、奥穂から吊尾根を経て前穂高岳と明神岳。西穂の左に笠ヶ岳とその奥に黒部五郎岳、薬師岳、水晶岳、鷲羽岳。南には昨日登った霞沢岳、乗鞍岳、焼岳。下に岳沢と上高地、と見飽きることのない大展望にシャッターを重ねた。



### (4) 穂高の山小屋

今回はウェストンの足跡を辿りたい気持ちから、嘉門次小屋と徳本小屋に宿泊した。嘉門次小屋は、ウェストンが槍ヶ岳を登頂する時に道案内をした嘉門次の建てた由緒ある山小屋である。ここは岩魚焼きが有名で、夕食に出たが本当においしかった。明神池がすぐ脇にあり、早朝は誰もおらず散歩に良い。徳本小屋は小さい山小屋だったが、宿泊客が5人のみでゆったりと休むことができた。峠の穂高スポットはウェストンが感動した眺めである。最後の西穂山荘は、込むと予想したが宿泊客は11名のみだった。強風でロープウェイが止まったためである。私は上高地から歩いたので、その影響を受けずに小屋に入れた。5人部屋だったが、埼玉からの男性と2人だけしか入らず、ゆったりと休めて良かった。(同年代のこの男性、2月に中の湯から明神までラッセルして入ったとのこと、良い写真が撮れたらしい。4月にはほおのき平から雪の上を歩いて豊平に至り乗鞍岳に登ったそうだ。えらい！)



来年は8年ぶりに立山へ行こうと思う。迫力ある13mの雪の大谷、雪面に戯れるたくさんの雷鳥、雄山から見下ろす雪に埋もれた室堂平、立山三座の厳しい縦走、みくりが池温泉からの夕日に染まった大日岳、など今でも目に焼きついている。来年は有志を募って行こうと思う。安全登山のためには、ピッケル・アイゼンを使った雪上登山技術が必要です。希望される方は日頃から研鑽しておきましょう。